

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 184号

平成29年8月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

### 新渡戸稲造「人生雑感」より (4)

#### 悲哀の使命 (1)

キリストは聖書に悲しみの人と記され、ゲーテはキリスト教を悲哀の宗教と称したことを見ても、いかにキリスト教が悲哀に重きを置き、かつ悲哀の観念に打たれて心細く思う人、寂しく感ずる人、すなわち悲哀の人々に偉大な慰謝を与えるかがわかる。「苦しい時の神頼み」ということわざは、悪い意味にとられやすい。…いかにも「苦しい時の神頼み」は、人の心の弱くまた卑しいことを言ったように思われるが、実はこのことわざは人の卑しい心ではなく、ただ弱い心を表わしているものである。気が弱い力がないと言うと、卑しいように聞こえるが、実は自分で弱いと思う人は強く、自分は強いと思う人はかえって弱い。…

## 悲哀の使命 (2)

英雄であれば英雄であるほど、自分の弱きを感じず。聖人であれば聖人になるにしたがって悲哀が深くなる。神は要らない俺は偉いと思う者は真人間でない、熊か人かいずれ馬鹿に違いない。ビスマルクは「ドイツ国民は神の外何者をも恐れぬ」と議会で叫んで大喝采を博したが、当時日本留学生の一人がこの言葉を引いて「日本国民は神をも恐れぬぞ」と威張っていた。こんな馬鹿をいう者は日本人ではない。…真に国を憂う日本人は、胸に手を置き、これからどうしようかと情けなく思うのが当然であって、このような悲哀を覚えないものは強くない足りない不具者である。児玉大将は日露戦争避くべからずと、劈頭に主張した大胆不敵な大将であったが、他面においては、この国家興亡の岐れる時に際して、重大なる責任を帯びた大将は、とうていこの度の大事は人間業では及ばないことを知る故に、国民がちょうちん行列をやって連戦連勝を祝った際に、満州の野で毎朝毎朝太陽を拝して祈願をこめていたそうである。神を信じ頼むことぐらい人にとって強い力はない。神の外何者をも恐れぬと叫んだビスマルクはすこぶる強い人であった。かような信念の無い者は吹けば飛ぶような連中である。

### 悲哀の使命 (3)

キリストは悲哀の人で聖書は彼の笑ったことを記していない。モーゼもやはり泣き面の人である。十戸を北海道に植民することさえ大変であるのに、百万の民衆を連れて、40 余年も放浪したその植民事業は、いかに彼を苦しめたか知れない。牛の像を拝んだり、水が無いと叛いたりした民衆を率いて、雲煙も迷う大砂漠を、40 年の長い間、——40 年の間には結婚もあり、出生もあり、死亡もある——彷徨した彼の憂苦はいかばかりであったろう。彼の植民事業は、到底人間業とも覚えぬくらいに大したことである。モーゼが悲哀の人であったことはもつともである。リンカーンは人の前ではおどけたが、誰もいないところでは泣いてばかりいた。彼もまた悲哀の人である。ショウペンハウエルは人相は何もしないときに表われると言い、ソクラテスは人の性質はもの言うと言つと解ると説いたが、リンカーンの物言わぬ顔は実に憐れな有様であった。憐れは偉大なる靈魂の特徴かもしれぬ。というて泣き面する人が英雄だという結論にはならぬ。人と会うときに自分の悲哀を他人に負わせるのは禁物、否我々はかえって人の悲哀を自分に分かつように努めたいものである。

## 悲哀の使命 (4)

諸君にも何かの悲哀があるに違いない。老若男女の区別なく、人という人はみな悲哀を感じる。ユーゴーの『レ・ミゼラブル』のみ悲哀の歴史ではない。電車の車掌にも自動車上の令夫人にも、位高き大臣にも『レ・ミゼラブル』の1章は必ずある。何事でも聞けば悲しい、同情に堪えぬことのみ多い。

宇宙全体が悲哀に満ちたものではあるまいかとも思われ、進化は悲哀の歴史ではなかろうかとも疑われる。ゆえにゲーテは歌った「汗をもってパンを食い、あるいは終夜眠らずして悲哀に泣いた者にあらざれば、いかなる天賦の力が悲哀の中にあるかを知り得ない」と。本当だ、人の悲哀は偶然でないなら、悲哀には悲哀の使命があるに違いない。天は人の泣き顔を見るのを嫌うならば、この悲哀には何か意味が潜んでいるはずである。悲哀の意味を知らぬ人はまだ人生の真相を解していない。

## 悲哀の使命 (5)

悲哀の使命の一つは、他の道では解らないすなわち学問や哲学は言うまでもない、常識などでも到底わからないところの真理を知らしむるにある。ある婦人が釈迦の下に来て死んだ子供をよみがえらしてくれと頼んだ。釈迦は快く承知して、まだ死人の出たことのない家へ行ってその家の庭にある木の葉を持って来い、そうしたら子供を生き返らしてやろうと答えた。婦人は非常によろこんで早速諸所を尋ねたところが、木の葉はお易い御用でくれたが、何の家族においても死を知らぬものがなかったので、ついに釈迦のもとに帰り来て、もはや子供は甦らさなくてもよい、愛するものを失うことは、人生に随従していることが解った、決して天をうらまず、人もとがめませぬと告げたそうである。この婦人は愛する子供の死によって悲哀の真理を知るを得たが、それまでは誰が何と教えてもこれを認めることができなかつたのである。

## 悲哀の使命 (6)

本読みは私の職業だが、このような話は何の書物にも多くある。悲哀を鍵にすれば知識的研究も達し能わぬ真理の蔵を開くことができる。

ある夫婦が愛する女の子を失った。夫は自暴自棄になりただただ酒ばかり飲んで仕事を休み、妻は失望落胆やるかたなく、仕事も手につかなくなっていて、お定まりの夫婦げんかが始まった。遂に離縁に決し、夫婦争いながら荷物をわけける間に、子供のもてあそんだ人形が出てきた。夫も妻もしばし人形を見つめたまま何も言わずして立った。ややあって両方手を出して握手し、再び共に生活を営むように約束した。すなわち悲哀により離れたる心が悲哀によりて結ばれた。心理学上の議論などではこの真理はわからない。ただ悲哀の鍵によってこの真理が会得される。悲哀の使命の一つは確かにここにあると信ずる。

## 悲哀の使命 (7)

悲哀は勇気を生む。悲哀という基礎の無い勇気はこれ匹夫の勇だ。お祭り騒ぎの勇に過ぎない。不憫な者だと憐れんで、救おうとする勇気がなければ真の勇ではない。貧乏な国民を助けたため政治界に身を投じ己を捨てて身を致すのが本当の勇気である。しかし名利心に駆られて太鼓たたいて内閣を乗っ取ろうとするための勇は匹夫の勇である。この意味において大塩平八郎は実に面白い男であった。権力ある者にいじめられている人々がかわいそうだと憐れんで起った。これ真の勇気である。真の英雄主義（ヘロイズム）は悲哀がなければ成り立たない。悲哀とはべそをかくことではない。否精神を披歴してこの民をいかにせんと奮起することである。キリストの英雄主義（ヘロイズム）はそこだ。ピラトを憎むのではない。ローマ帝国をどうするのでもない。この民をいかにせん、この人をいかにせんであった。キリストの勇気は悲哀より湧き出でた。

## 悲哀の使命（8）

悲哀の観念は事業を企てる。事業を企てるのは普通金を儲けるため、名誉を得るためだが、私のいわゆる事業とは清められた動機のことである。悲哀は要するに事業の動機を清めるものである。乃木大将が学習院院長になったのは、名誉や金銭のためでなく、全く自分の子供について悲哀を持っていたからである。小説『不如帰』に表われた信者の老婆子川某は、自分の子供を失ってからすべての人を子供と思い、夫と別れてから深い意味で人を愛し得るようになったと告白したが、実に世人とはその動機が違っている。乃木大将は私に「語らじと思ふ心もさやかなる月にはえこそ隠さざりけれ」と揮毫して下さったが、大将にこの悲哀があつてこそ子弟教育の事業にも従うことができた。大森平蔵氏の夫人は米国人でありながら、亡夫の遺志をついで体育事業に奔走している。夫人が言葉も知らず風俗も違う我が国の体育のために日夜尽力されるのは、全く夫と別れたという悲哀がその動機を清めたからである。悲哀は自己を清めた上にその動機を清めもってその事業に当たらしめる。



## 悲哀の使命 (9)

西洋人には日本人を歓迎する者が甚だ多いが、日本人で西洋人を朋友とする者が何人あるか。外人と見ると、異人だとののしる。外国人ならまだよいが日本人同士が「人を見たら盗人と思え」と言って排斥しあっているような始末。かように心の狭い国民がどうして発展し得よう。3日前に2、30人の人が路傍に集まっているので、何かと思って立ち寄ったら、けが人を囲んでいた。車にひかれた、否馬にけられた、いや転んだのだと、みな研究はよくするが誰も助けない。水を飲ませろ、薬が良い、それより医者と呼べと、よく発議はするが、誰も手を出さない。こんな時には何よりも実行的同情が必要だ。この同情の来る道は、悲哀より外にない。すなわちここがキリスト教の大切なところである。キリストは悲しみの人であり、キリスト教は悲哀の宗教である。

## 悲哀の使命 (10)

悲哀の意味や使命を知りかつ行うには、キリスト教の根本原理なる犠牲の観念にさかのぼらねばならぬ。悲哀が人世宇宙に満ちているということは、やがて人世宇宙が犠牲に充ちているという意味である。ただにキリストが人類のために犠牲になったばかりでなく、より小さい者がより大きい者の犠牲になったことによって、宇宙の進化は現在の程度までに達するを得たのである。この意味が分かったと犠牲も解れば悲哀も解る。願わくはわれらは自己の悲哀の経験を聖なるそなえものとして神にささげ、その聖旨を承り、もって天をうらまず、人をとがめぬ生活を営むことを期したい。

大となく小となく、すべての苦しみ悲しみ、嘆き憂いを聖なるそなえものとして神にささげ、もって血を滴らせて祈祷したゲッセマネのキリストの精神を学びたい。悲哀のために自暴自棄になった者もいれば、反って真の生活をたどるを得たものもある。悲哀のために人はどうにでもなる。この悲哀が悪魔より来たか、神よりきたかを断じ得ないものは、いつまでも地獄に迷っているほかはない。吾人にしてキリストの精神と自己を犠牲にする覚悟あらば、今まで述べた祝福の天降りすることは期して待つべきである。